

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年6月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

令和8年6月18日11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。その後、警報事項に変更はありません。

62-2火口や振子沢噴気孔群付近では、ここ数年にわたり噴煙・噴気が多く、特に62-2火口付近はごく微弱な発光現象が時々みられるなど、活発な熱活動が続いています。

3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が続いています。4月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加や62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化が認められ、62-2火口や振子沢噴気孔群付近の熱活動もより高まっています。

火山活動が高まった状態となっており、62-2火口及び隣接する振子沢噴気孔群付近ではその周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

62-2火口から概ね1.5kmの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3-①、図5～11、表1）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態で経過しており、活発な噴煙活動が続いています。5月以降は噴煙がさらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。また、振子沢噴気孔群でも今期間の噴気の高さが最大で稜線上700mまで上がるなど、活発な噴気活動が認められます。大正火口の噴気の高さは100m以下で経過しました。

62-2火口付近では、4月以降、高感度の監視カメラによりごく微弱な発光現象（火映を含む）を度々観測しており、今期間は2回観測しました。この現象は、62-2火口付近での高温の火山ガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

16日から17日にかけて実施した現地調査では、62-2火口及び振子沢噴気孔群で高温の火山ガスが活発に噴出していることを確認し、噴気・地熱域の拡大や噴出量の増加が認められました。また、62-2火口では、火口底の一部で繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-⑤～⑦、図3-③④、図4）

火山性地震は多い状態で経過しました。震源は主に62-2火口付近のごく浅い所、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近のごく浅い所～深さ1km付近に分布しました。

4月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動がやや高まっています。また、5月以降は、62-2火口付近で一時的な地震回数の増加も時折観測されています。

今期間、火山性微動は観測されませんでした。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年7月分）は令和8年8月10日に発表する予定です。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-②）

10日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたり1,400トンで、3月以前と比べて多い状態が継続していることを確認しました。

・地殻変動の状況（図2-⑧、図12～13）

GNSS連続観測では、2021年以降、62-2火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が認められています。

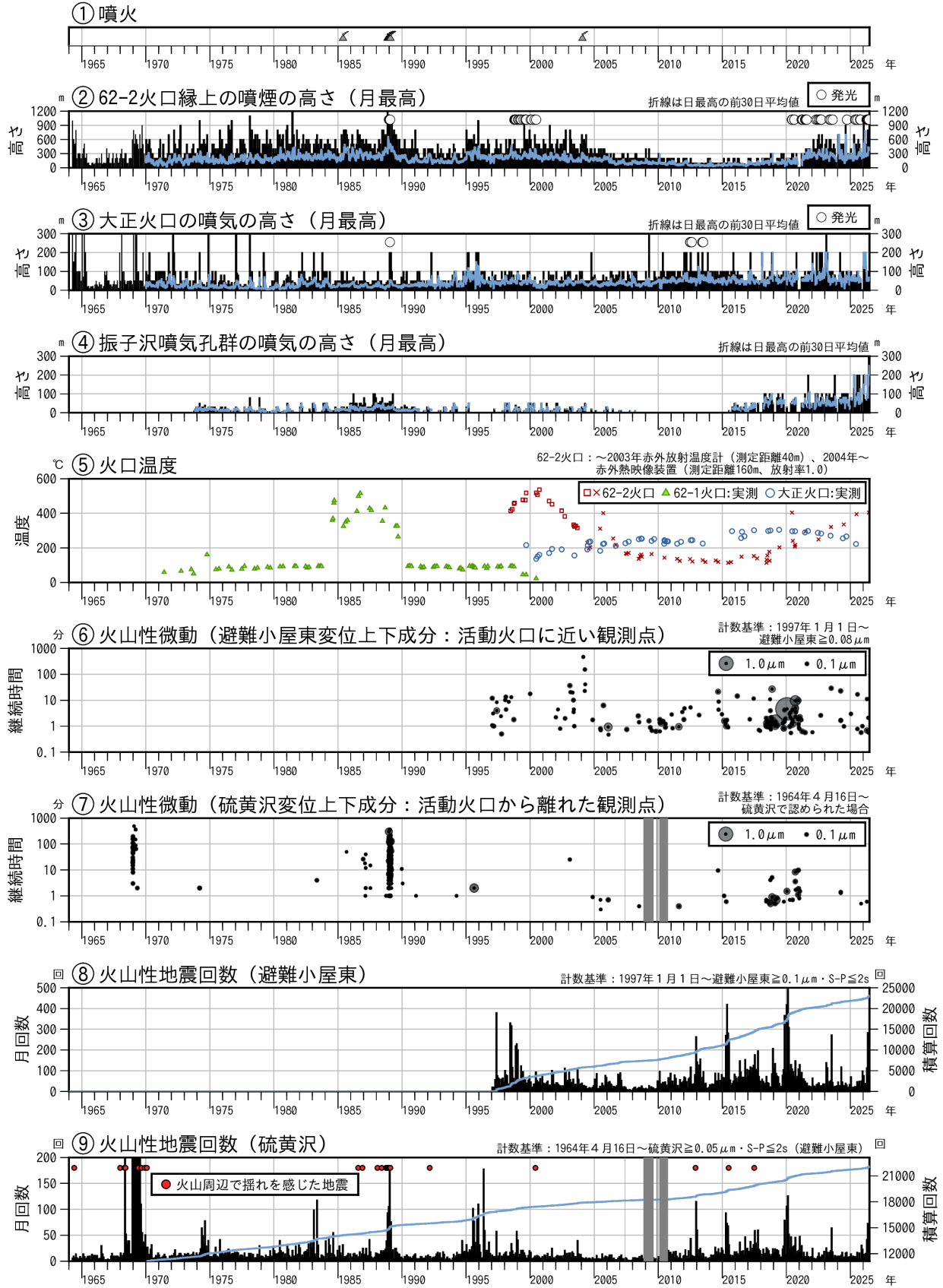


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年6月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。
⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

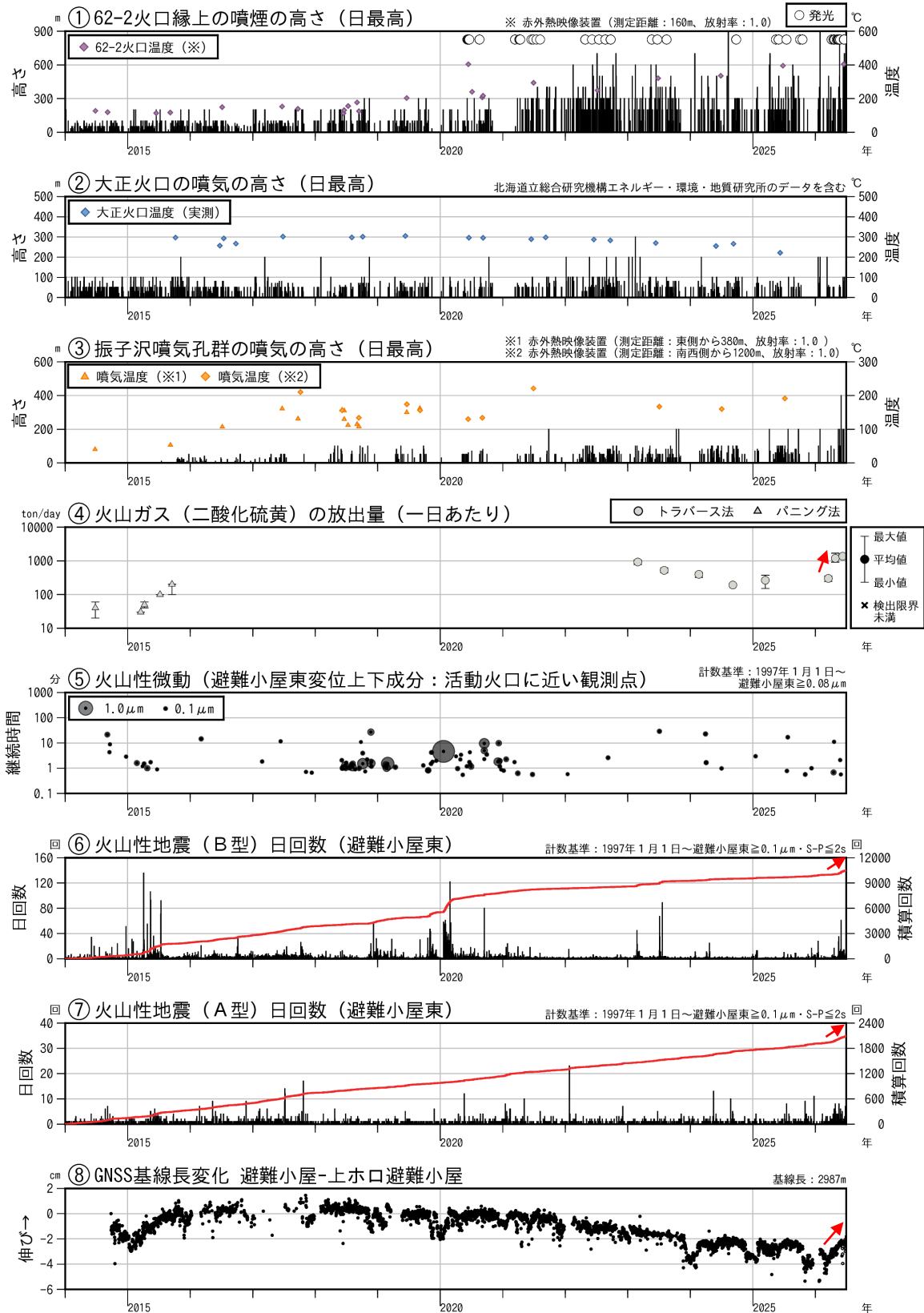


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2026年6月）

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

⑧は観測点配置図（図13）の基線④に対応しています。白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び（⑧）が認められ、4月以降は、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑥⑦）が認められています（赤矢印）。

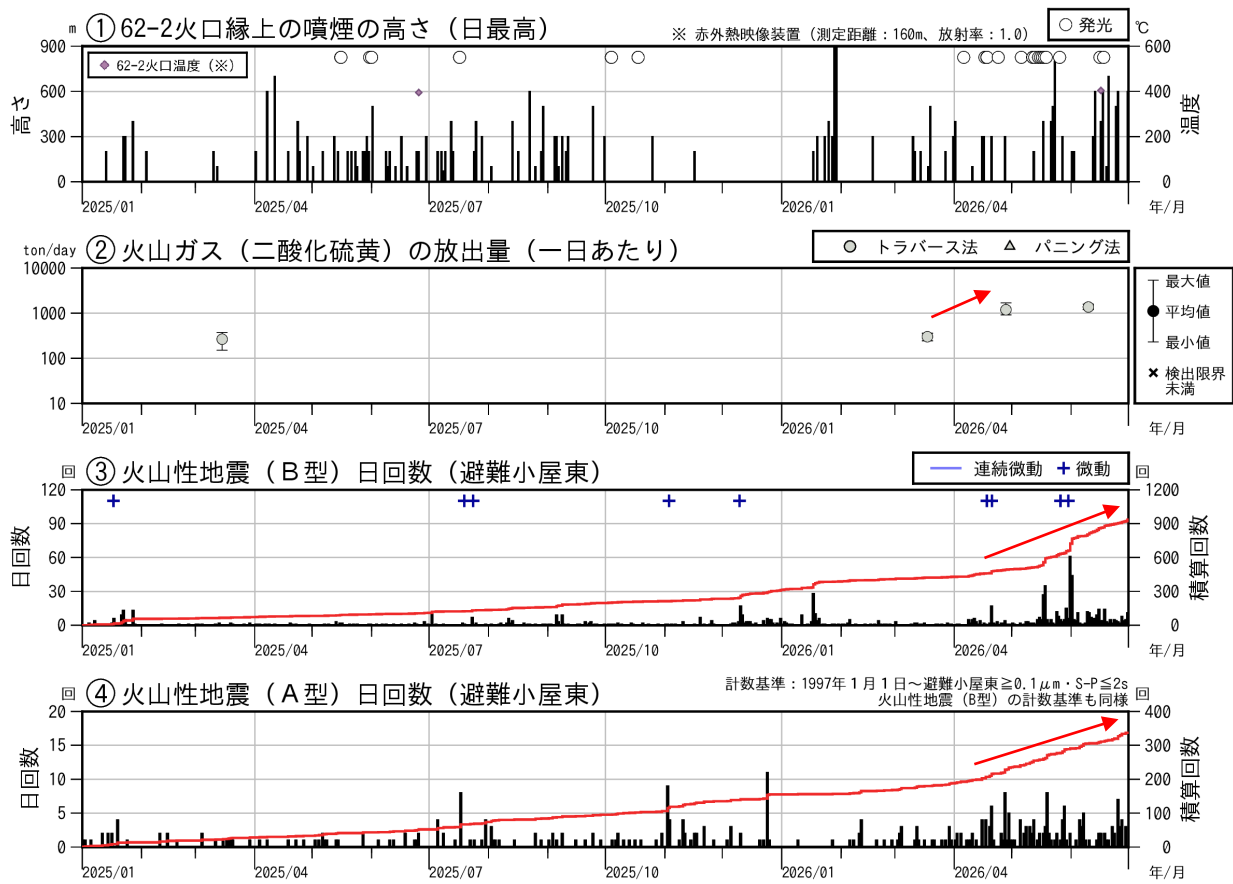


図3 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月～2026年6月）

②は気象庁による観測結果のみを示します。

③は主に62-2火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

④は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

- ・4月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（②）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（③④）が認められています（赤矢印）。

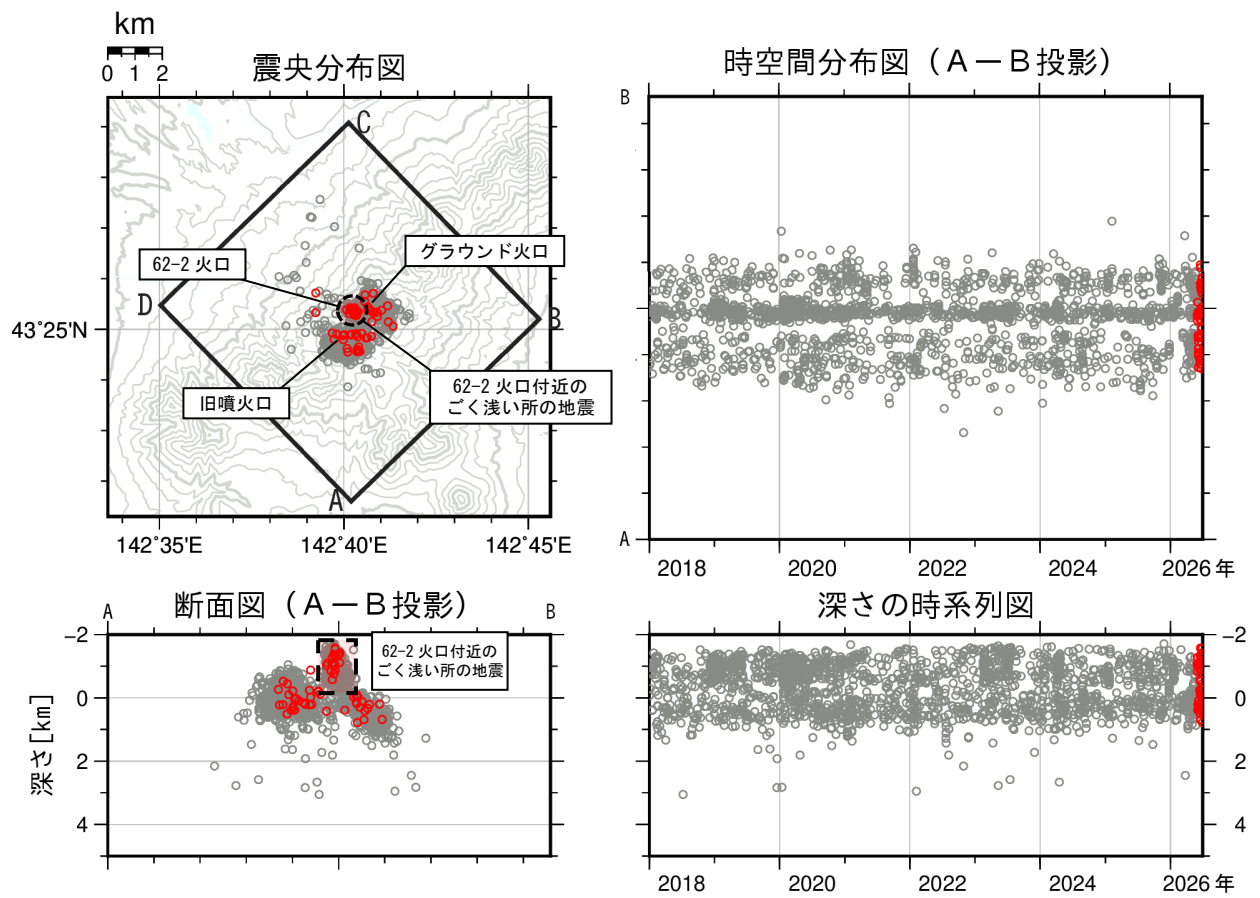


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年6月）
 ○：2018年1月～2026年5月の震源 ○：2026年6月の震源

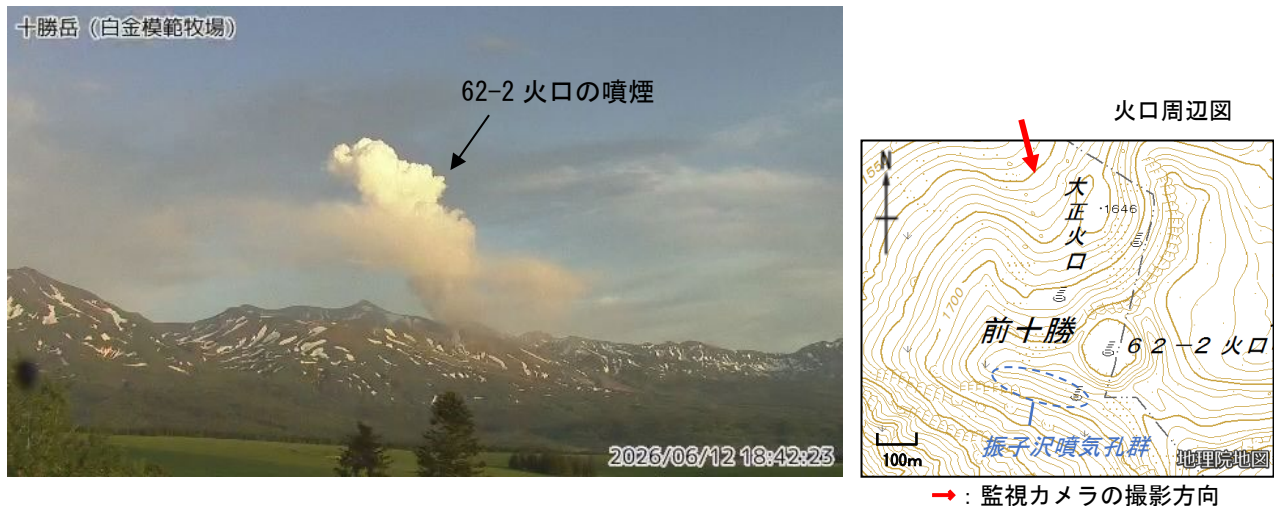


図5 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図
 ・62-2火口の噴煙は、5月以降さらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。

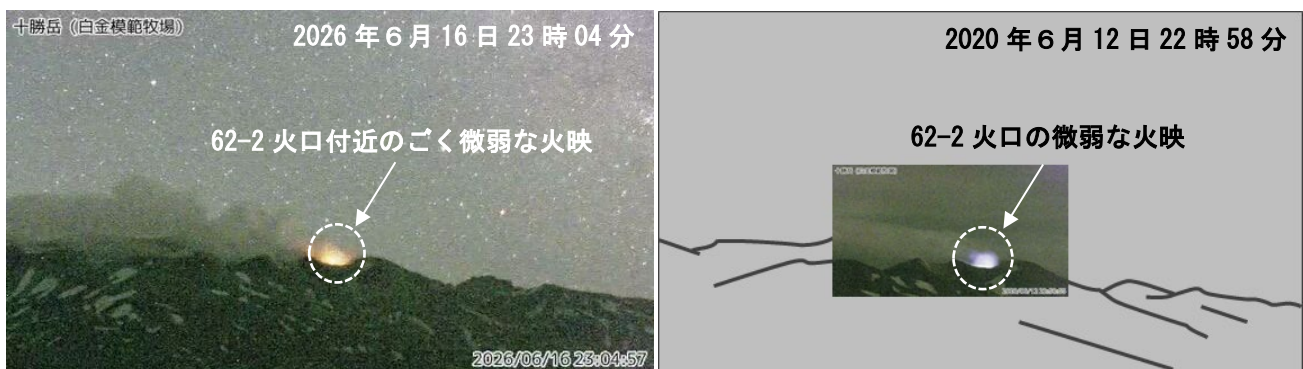


図6 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）（白金模範牧場監視カメラによる、撮影方向は図5と同様）
 左：16日に観測されたごく微弱な火映
 右：2020年6月12日に観測された微弱な火映（6月7日～19日の夜間、断続的に観測）

表1 十勝岳 2026年6月に観測された62-2火口付近の発光現象（山麓に設置された高感度の監視カメラによる）
 ※1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記している。

観測日	発光現象 ^{※1}	発光現象の強度、発生状況
16日夜	火映	ごく微弱
18日夜	火映	ごく微弱



図7 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図8 十勝岳 62-2火口内の状況（図7の①から撮影）

- ・火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・2026年5月の上空からの観測時と比べて火口内の湯量は減少していましたが、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出していました。

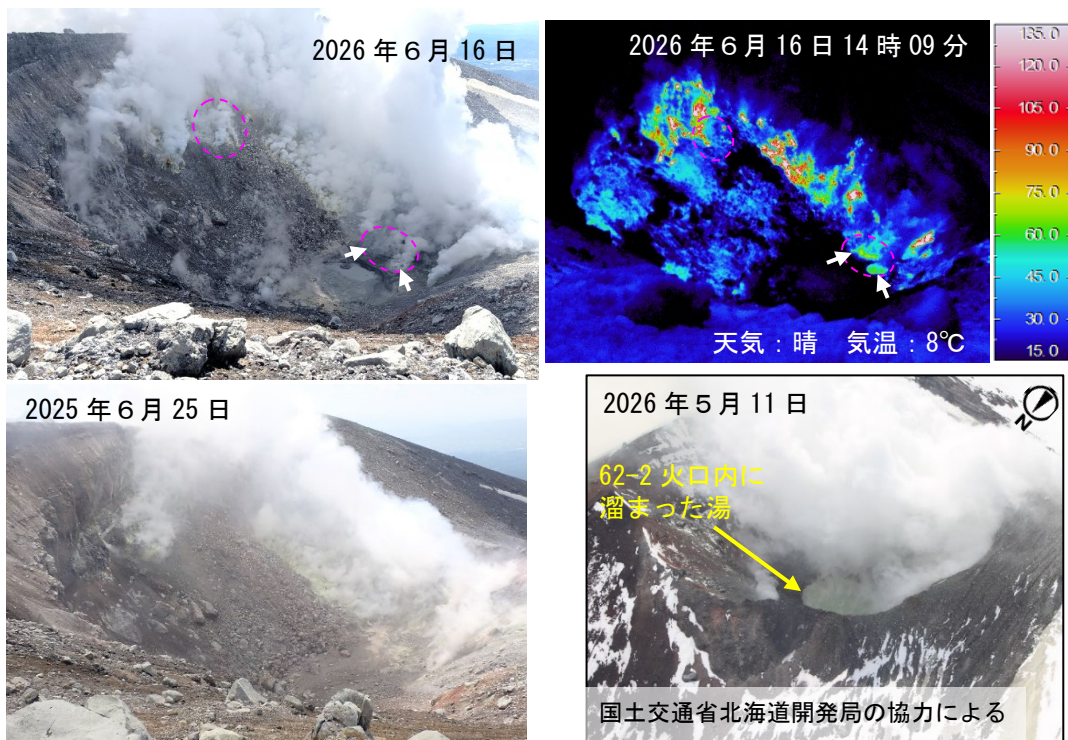


図9 十勝岳 62-2火口内の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布

上：今回の現地観測の写真及び地表面温度分布（図7の①から撮影）

左下：2025年6月の現地観測による写真（図7の①から撮影）

右下：2026年5月の上空からの観測による遠景の写真（図7の②から撮影）

- ・ 火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・ 2026年5月の上空からの観測時と比べて火口内の湯量が減少していましたが、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出していました。

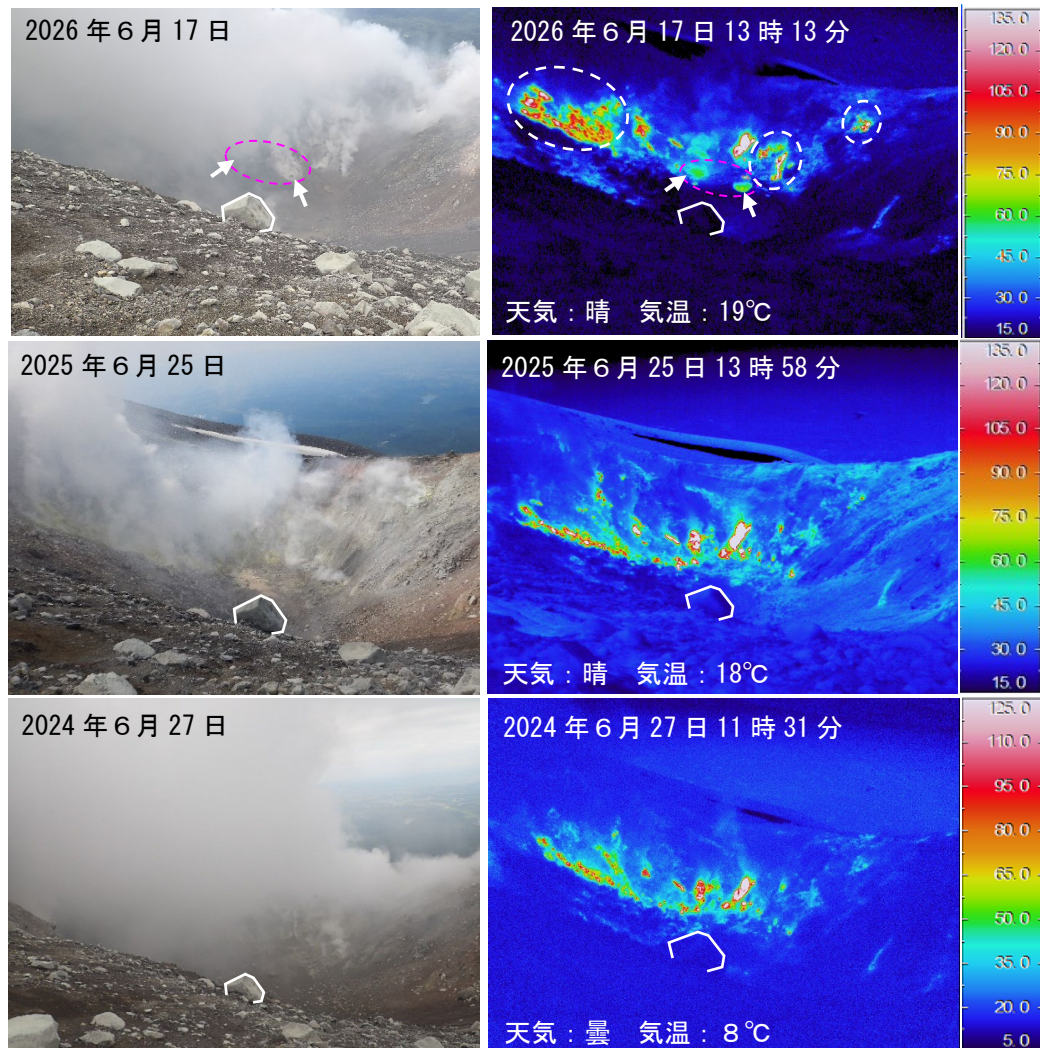


図10 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2火口内の地表面温度分布（図7の③から撮影）

白色実線は同一の転石の輪郭をトレースしたものです。

噴煙の影響により一部熱域が隠れている可能性があります。

- ・ 17日に実施した観測でも、62-2火口内で高温の火山ガスが活発に噴出している状況を確認し、噴気域の拡大（桃色破線）や熱泥水の噴出（白矢印）が認められました。また、噴煙の影響があるものの、その他の一部の噴気・地熱域（白破線）でも、これまでの観測と比較して熱域の拡大が認められました。

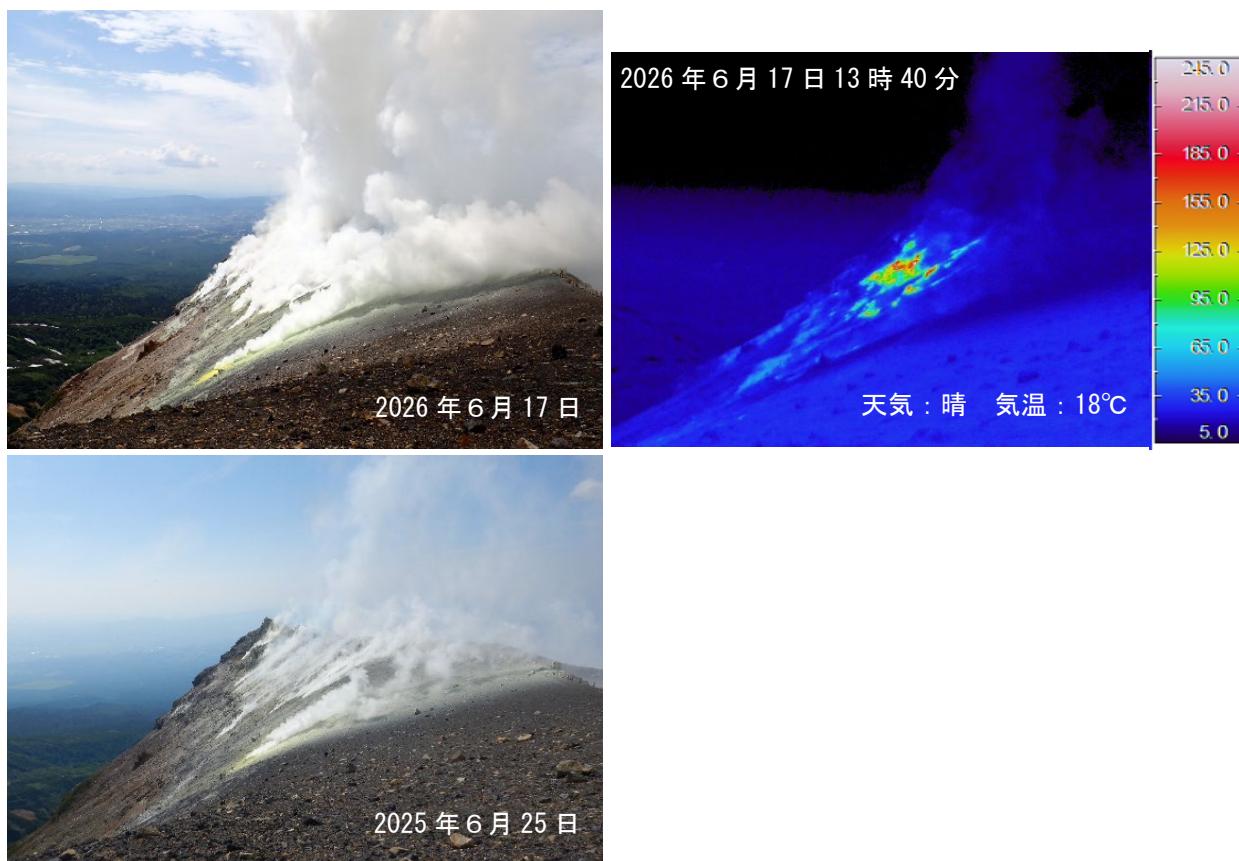


図11 十勝岳 振子沢噴気孔群の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布（図7の④から撮影）
・62-2火口と隣接した振子沢噴気孔群でも、高温の火山ガスが活発に噴出していました。2025年6月の観測と比較して、噴気域の拡大や噴出量の増加が認められました。

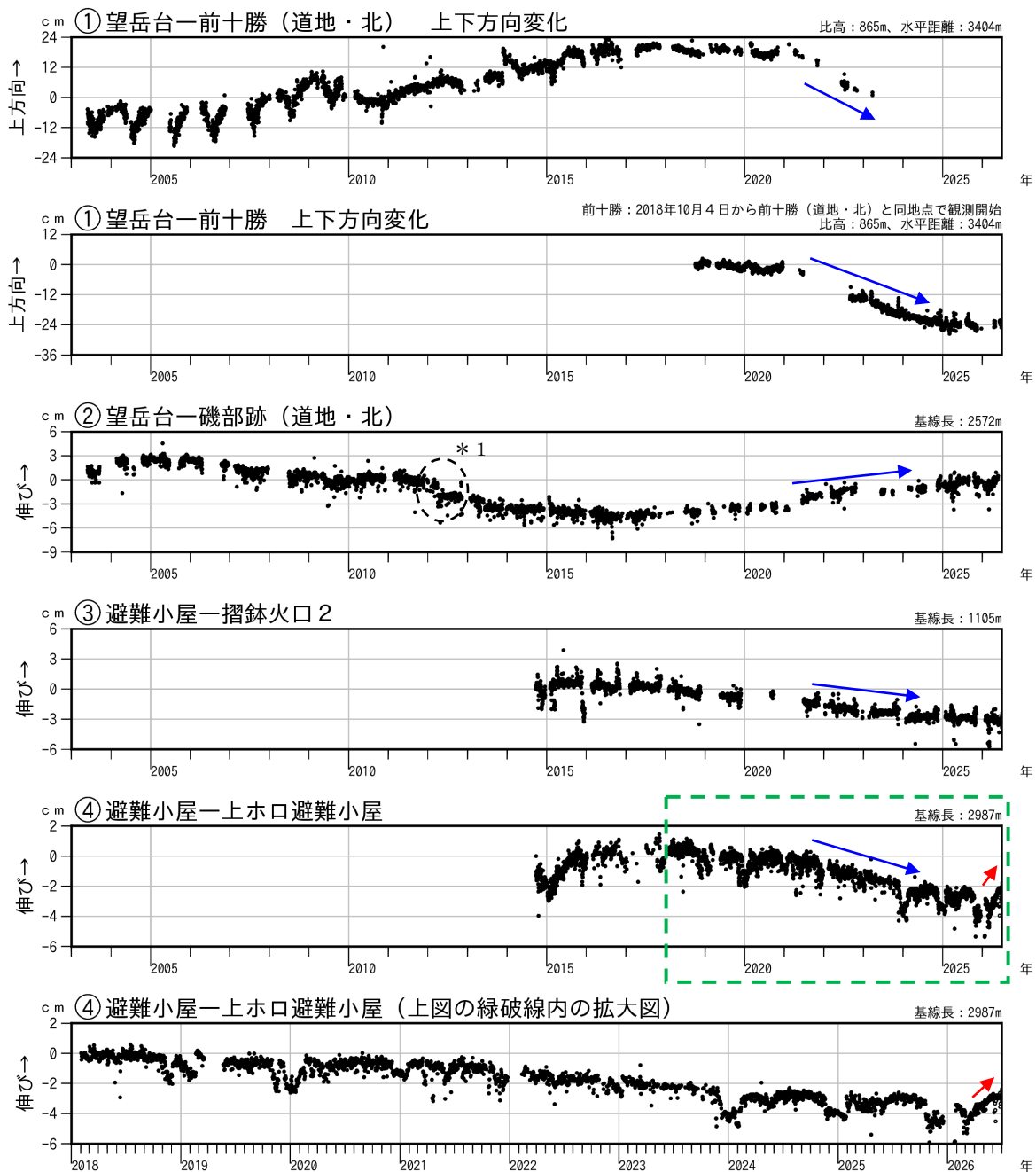


図12-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年6月）

グラフ①～④は観測点配置図（図13）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化（赤矢印）が認められています。

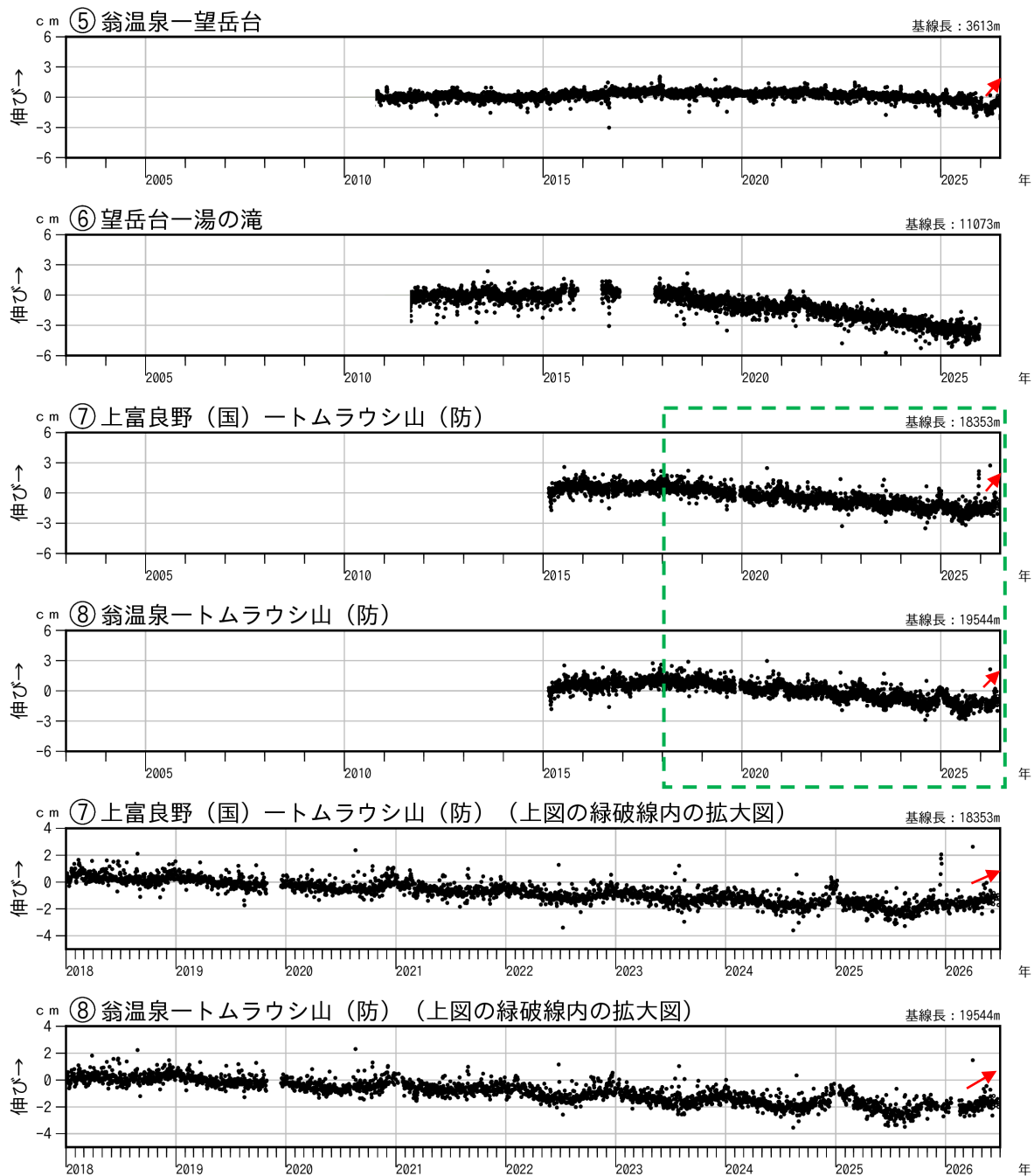


図12-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年6月）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図13）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは基線⑤⑦⑧で伸長が認められます※（赤矢印）。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※ 例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

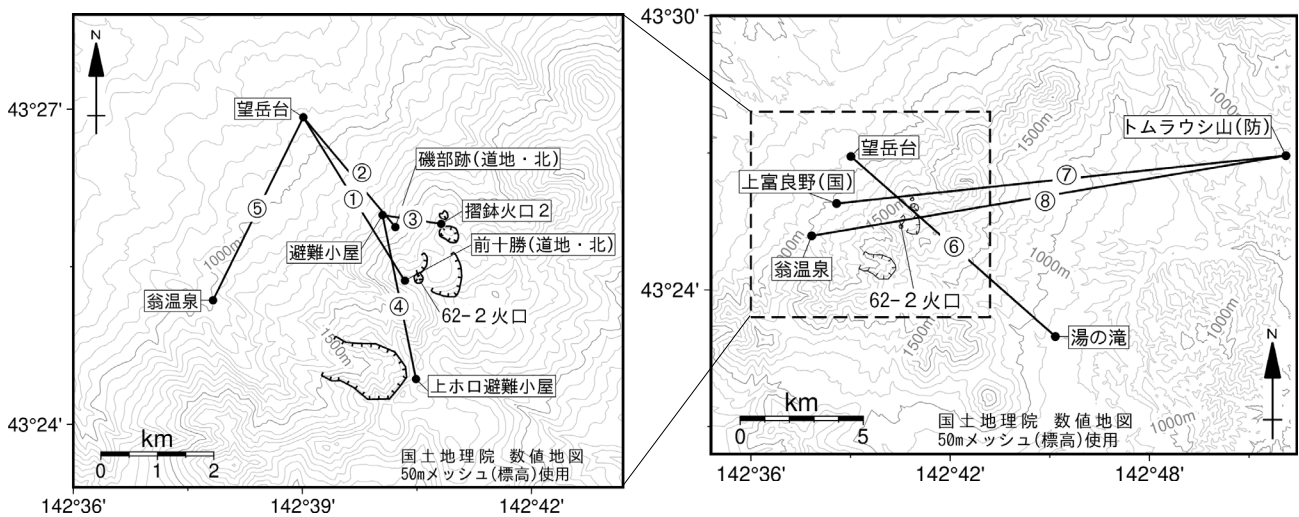
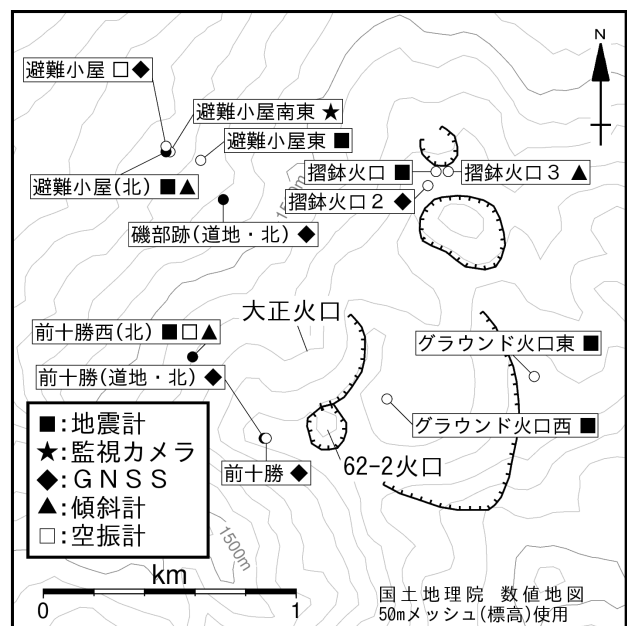
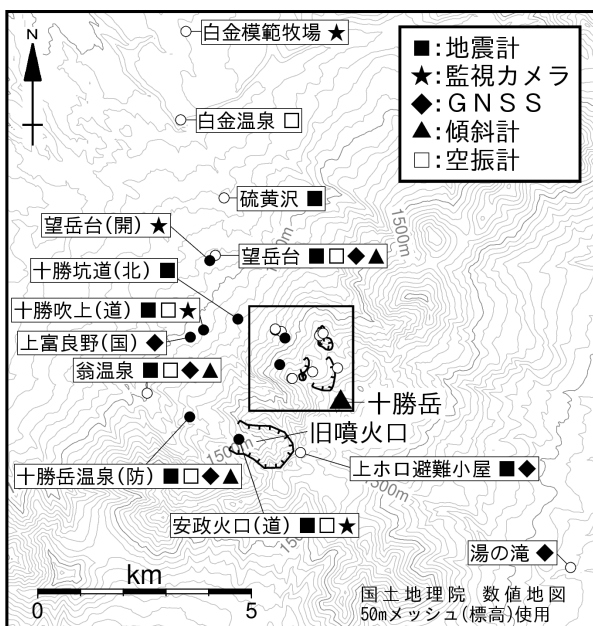


図13 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図2のグラフ⑧に対応しています。
 図中の基線①～⑧は図12のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
 (開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
 (道地):地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図14 十勝岳 観測点配置図